どの子にも読書の歓びを
「読書と豊かな人間性」の授業から

得　松　昭　行

02年前期初めて「読書と豊かな人間性」（2単位）を担当させていただいた。

児童生徒の発達段階に応じた読書教育の理念と方法の理解を図ることをねらいとする、実に幅が広くて深い子どもと読書についてのさまざまな問題をわずか１５コマ程度の時間で取り上げることができるかどうか、不安だった。とにかく内容が多彩で、子どもの読書活動、読書指導の根幹をなす数々の内容があったにもかかわらず、時間不足と勉強不足によって、上っ面をなでて通るようなことになったことを反省している。反省と改善を次の機会に生かしたいと考えて、限られた紙数だが以下のことを述べてみることにする。

Ⅰ　「読書と豊かな人間性」授業の概略
Ⅱ　児童の発達段階に応じた読書教育の理念と方法
Ⅲ　読書感想文の指導
Ⅳ　『二十一世紀に生きる君たちへ』を読んで感じたこと

Ⅰ「読書と豊かな人間性」授業の概略

まず「学校図書館司書教諭講習に相当する授業科目の授業内容」（別府大学）から、「読書と豊かな人間性」の内容の概略を拾ってみる。

ねらい

「心豊かな人間を育成する」という学習指導要領の観点を踏まえつつ、読書教育の理念と意義、並びに児童生徒の発達段階に応じた読書指導、図書館の利用活用指導、読書習慣の形成等についての理解とともに、教育的見識の涵養を図る。

内　容

１　読書の意義と目的

（１）多メディア時代の社会と読書　　（２）読書資料の多様化と読みの多様性

２　子供の読書実態と指導

（１）児童生徒の読書実態　数量的動向　質的動向　　（２）実態に基づく指導　読書習慣の形成を目指して　読書能力の発達と読書興味の拡大　読書環境の整備　　（３）読書指導計画と司書教諭・教科・学級担任等による指導

３　読書資料の種類と活用

（１）児童文学の歴史　　（２）読書資料の種類と問題点　出版現況　各ジャンルと諸問題　ヤン

グアダルト向けの図書と諸問題　（3）読書資料の選択　資料評価法　資料の選び方・与え方　資料選択のための参考資料

4　発達段階と場に応じた読書指導

（1）読書入門期の指導　（2）初歩読書期の指導　（3）多読期の指導　（4）成熟読書期の指導　（5）読書指導の分担と提携　（6）調査・研究のための読みの指導

5　子どもと本を結ぶための方法

（1）集団指導　ストーリーテリング　読み聞かせ　朝の読書等　（2）個別指導読書相談　フロアワーク　読書記録と発表の諸方法　読書不振・読書過多傾向対策　（3）読書資料の自律的選択力の育成　読書資料紹介の原理　ブックリストの作成　ブックトーク　放送、展示、掲示　（4）読書体験の表現と交流　読書感想文　読書感想画　読書郵便ほか　ドラマ化、ゲームほか　読書会、読書報告ほか

6　地域の関連施設等との連携

（1）公共図書館との連携　（2）地域文庫、公民館等との協力　（3）家庭との連携

7　現代における読書指導の課題

（1）不読者への対応　（2）情報読みの指導の深化と拡充　（3）子供の読書環境の整備

II　児童の発達段階に応じた読書教育の理念と方法

児童の発達段階と読書についての4視点

1　読書の興味･意欲・関心

2　読書力

3　表現力

4　読書習慣

1　読書の興味･意欲･関心

以下、低学年から高学年へ進めていくことを念頭において記述。

（1）読書を楽しむ

読み聞かせやストーリーテリングなどを楽しんで聞く。自分で本を読む。いろいろなジャンルの本を読む。自分から進んで読む。

（2）学校図書館を利用する

学校図書館にいろいろな本があることが分かる。学校図書館の掲示物、サインに関心を持つ。学校図書館の利用のしかたが分かる。自分で本を探して読む。目的に合った本や資料を選ぶ。それらを読む、活用する。

（3）学校図書館以外の施設を利用する

公共図書館を利用する。公共図書館の利用のしかたを知り、きまりを守って利用する。書店に行き、本を読んだり、買ったりする。調べ学習をしたり、総合的な学習をするために図書館を利用する。

（4）本を紹介する

おもしろかった本、すすめたい本のことを友達、先生、家の人に話す。大好きな本、楽しかった本を「この本おもしろいよ」や「読書ゆうびん」などで紹介する。おもしろかった本のことをイラストで描いたり、読書新聞で紹介したりする。

2　読書力

（1）ことばや文章の意味が分かる

ひらがな、カタカナ、漢字、カタカナ語、数字などの文字を読み、その意味が分かる。ことばに興味･関心を持つ。文の構成や特徴が分かる。

（2）内容が分かる

短い範囲の様子や話の流れが分かる。時間的な順序、場面や状況の移り変わり、人と人との関係、人の心の動きなどをつかむ。全体のあらすじが分かる。叙述に目を向ける。主題をつかむ。

（3）イメージをふくらませて読む

登場人物の気持ちを想像しながら読む。登場人物の性格、特徴、取り巻くものの様子、出来事などを想像しながら読む。登場人物の気持ちや情景の変化を想像しながら読む。

（4）感想を持つ

おもしろいところ、楽しくなるところ、かなしいところ、こわいところはどこかを感じながら読む。登場人物などに共感したり、疑問を抱いたりしながら読む。登場人物について、自分に置き換えて考えながら読む。

（5）深く考える

知らなかったことを読書によって知り、自分のこと、周囲の人々のこと、世の中のこと、科学や歴史などを見直す。知る喜びを味わい、より豊かに生きようとする意欲を持つ。感動したり、未知の世界へ誘導されたりすることによって、感性を育てる。

3 表現力

（1）話す

おもしろかったこと、感動したことを話す。分かったこと、心に残ったことを分かるように話す。主題や要旨をとらえ、みんなに通じるように話す。

（2）音読する

その場面のようすがよく伝わるように声に出して読む。自分が感じていることが聞き手によく分かるように表現する。主題や要旨が伝わるように朗読する。

（3）話し合う

それぞれが自分の感想を出して話し合う。とくに心に残ったところを出して話し合う。友達の感想や意見を、自分の意見と比べながら聞き、話し合う。

（4）書く（読書感想文）

おもしろかったこと、感動したことを書く。登場人物と自分を比べて、思ったこと、考えたことを書く。初めて知ったこと、驚いたこと、心を打たれたことを書く。主題や要旨をとらえて書く。

（5）その他

読書記録　　読書感想画　　ペープサート　　紙芝居　　続き話　　創作

4　読書習慣

（1）読みたい本を選ぶ

書名、表紙、さし絵、文字の大きさなどから、自分の好きなものを選ぶ。先生、友達、家の人の話を聞いて選ぶ。どの書架にどんな本があるかを知り、自分の好きなもの、読みたいものを選ぶ。書名、著者名、目次、はじめに、あとがき、書評などを参考にして選ぶ。目的に応じて選ぶ。

（2）領域を広げる

絵本、やさしい本を読む。授業で学んだ作者の本を読む。シリーズや長編を読む。伝記、科学読み物、スポーツ、芸術、日用書、図鑑、年鑑、事典、辞典など、読書の幅を広げる。目的に応じて読む。

（3）読書のマナーを身につける

大きな声を出さない、走りまわらないなどのきまりを守る。借りるときの約束ごとを知る。本を元あったところに返す、汚したり、破ったりしないなど、本を大切にあつかうことができる。乱雑に置かれている本をきちんとそろえる。

Ⅲ　読書感想文の指導

読書感想文は読書嫌いの元凶か

「野上弥生子の感想文を書こう」と学生達に呼びかけた時、強い反発の声が出た。

「感想文を書いたことがない」「書きたい者が書けばよい」「読書は押しつけてはいけない。無理に感想文を書かせるのはおかしい」「感想文があると、そのことばかりに気をとられて、読書に身が入らない。感想文は私を読書嫌いにしたと思う」「今までに感想文の書き方を勉強したことがない。先生は、よくできる子に書かせていた」など、学生たちの声は、彼らが学んできた学校での読書感想文の指導、読書指導、読書教育の貧弱な現状をかなり言い得ていると思った。

しかし、このまま「ああそうかい」で終ってはいけない。

「言いたいことは理解できる。しかし、自分は書いたことがない、書けないから、子どもの指導ができないというわけにはいかない。そんな教師ではいけない。」「なぜ自分は感想文が書けないのか、反面教師に学ぶつもりで勉強してみようじゃないか。情景や登場人物の心理や性格をつかむ。主題をとらえる。自分の生き方と対比して考えてみる。物語を要約してみる。そういう読み方をするところから始めてみよう」「読書は押しつけてはいけない、それはその通りだと思う。しかし、意欲づけをしたり、おもしろい本を紹介したり、友達の体験を聞いたり、読書の素晴らしさを語ったり、教師のいろいろな働きかけがなされて、子どもは本を読む場合が少なくない。そういう働きかけは、押しつけとは違う。指導と言ってもよい」「子どもと本を結びつけるために司書教諭として忘れてならない

こととはどんなことか。学級担任と読書感想文の書き方を学習する時、司書教諭はリーダーシップをとるべきだ。」

「読書感想文の書き方について、時間を取って話すので、感想文くらいは書けるみんなになってほしい」と説得して、感想文の書き方を指導することにした。

読書感想文を書く指導をする際の留意点　　寒川道夫氏に学ぶ

1　読書の後で、読んで分かったこと、おもしろかったこと、楽しかったことなどを話す態度を育てる。

2　感想発表を強制したり、義務的にさせたりしない。

3　教師との対話や友達との話し合いなどにより、読後心に浮かんだものを引き出すことに力を入れる。

4　感想だけを抽出することをできるだけ避け、あらすじや内容とともに話させたり、文章表現させたりする。

5　同一の図書を読んだ数人で、座談会ふうに感想を述べ合う機会を設ける。

6　感動した個所の文章や要点をメモさせ、そのメモに基づいて感想文を綴らせる。

7　自分の生活環境・経験・意見と結びつけて、感想を述べるようにしむける。

8　他の読書経験と比較した感想を述べさせる。

9　感想の表現形態を一律にならないように工夫させる。例えば、作者への手紙の形式、登場人物への手紙または呼びかけの形式、「もし自分が主人公だったら」と書く、読書日記ふうに書くなど、多面的に指導する。

10　文学書の感想では、作家研究や文芸批評的であることよりも、作品を読んで得た素直な感想を尊重する。

11　自分の最も強く感じ、強く他人にうったえたいことを中心点として書くように導く。

12　同じ年齢くらいの他人の読書感想文と比較し、考える機会をつくる。

13　ふだんから、読書ノートやメモ帳に要点や感じたことなどを簡単に書きとめておく方法をすすめる。

14　特に心をひかれた言葉や文章を引例して書くことの効果に注目させる。

15　特に強く考えたこと・感じたこと・興味を持ったことがらのほかに、疑問を持ったこと・問題として意識した点を書くように導く。

16　特に強く考えたこと、感じたこと、興味を持ったことがらのほかに、疑問を持ったこと、問題として意識した点を書くように導く。

なお寒川道夫氏は、読書感想文を書く意義について次のように述べている。

（1）　読み取ったものを確認し、自分の生活や思考と結びつけて得た感想を、分かりやすく表現する。

（2）読書を通して得たこと、学んだこと、感じたこと、疑問に思ったことなどを、読書の内容に

即して書く。

（3）あらすじ・要旨、主題はもちろん言葉にも注意を払い、読み流すことのないようにしたい。（『生活綴方辞典』日本作文の会編　明治図書　1969年刊）

読書感想文を書こう　　紺野順子氏に学ぶ

1　本を読み、感想文を書くということは、一冊の本と真剣に向き合うことで、自己を見つめ、新しい自己を発見するという営みである。

2　楽しい読書に加えて、一冊の本と本気で向き合う読書、深く考える読書があってもよい。それは自分の世界を広げ、よりいっそう読書の楽しさを教えてくれる。

3　読書感想文は読書「感動」文である。味わった感動を書こう。感動は千差万別、人によって違うからおもしろい。

4　本には人類のはかり知れない経験、知識、知恵、情熱などが盛り込まれている。しかし、これらは自分から本を開き、読みとろうとしない限り、伝わってこない。

5　ぼんやりと読んでいたのでは、感想文は書けない。何について書こうかという目的意識を持つことが大切。

6　読んで考える。考えて読む。注意深く読む。角度を変えて読む。そうすることによって何かに気がつき、何かが見えてくる。

7　考えて読むとは、文字の表面だけを見るのでなく、自分のことに置き換えて「もし自分だったら」と想像して読むこと。自分の問題として掘り下げて考えてみよう。

8　繰り返して読もう。まずストーリーの展開をつかむ。二回目は一回目には気がつかなかったことが分かるだろう。心の響いたところ、意味が分かりにくかったところは何度でも読む。声に出して読む。書き写してみるのもよいだろう。

9　感想をただ並べて書くだけ（羅列）ではおもしろくない。文に沿って感想を述べるやり方では何を言いたいのかはっきりせず、散漫になる。

10　作品に描かれていることに基づいて、テーマ（主題）をつかんで書くことも大切。

11　この作品を読んで①得たと思うものは何か、②今までに意識したことも、考えたこともなかったことで教えられたことはないか、③もっと考えてみたいと思ったことはないか、④作中人物と比べて、自分と共通するところ、異なるところはないか、⑤今までの自分と考え方が変わってきたということはないか。これらを考えてみて、思い当たることがあればそれはなぜか、理由を作品に沿って考えて、具体的に書く。

12　読んでも、はっきりとつかめないことがある。その時はそのことをそのまま綴ってよい。

13　半分眠ったような状態で、「べつにー」などと言っていては豊かな感性は育たない。

14　中身を考えながら読むとおもしろい。とくに文学作品は、事実を伝えることを目的とした本と違った独特な構成や表現方法をとっていることがあるということを知って読む必要がある。「布石」「伏線」「行間」「風景描写」「情景描写」を読み取ることができるようになりたい。

15　作者・著者と「対話」を試みることも必要である。作者が言いたかったことは何か、作者の立場になったつもりで読んでみたり、自分ならこう考え、こう書くのになあと考えてみるのもおもしろい。

16　作者はどんな人で、どんな意図があってこの作品を書いたのかを知り、まえがき、あとがき、経歴、解説などから作者のことを知ることも忘れてはならない。

17　メモカードをいつも手元に置いて、読みながら心に浮かんだことをメモしていく。読み終わった後も、思いついたことをメモする。感想の断片であるメモをつなぎ合わせ、言いたいことをはっきり述べて、筋道をつけ、全体の構成を作り上げる。

18　書きたいことがきちんと表現されているか、どうでもよいことを述べていないか、脱線していないか、正しい言葉、正しい文章か。十分に推敲する。

（『読むことは生きること』紺野順子著　ポプラ社　1996年刊）

実際に、司馬遼太郎の『二十一世紀に生きる君たちへ』、新美南吉の『手袋を買いに』、寺田寅彦の『茶碗の湯』の読書感想文を書き、その都度評価し、代表的な感想文を授業の初めに紹介していった。『二十一世紀に生きる君たちへ』の感想文の中から私が選んだものを読んでいただこう。

Ⅳ　司馬遼太郎『二十一世紀に生きる君たちへ』のを読んで感じたこと

「読書と豊かな人間性」の授業で書いた読書感想文の中から優秀と思われるもの5編を選んだ。

二十一世紀の社会　　国文学科　酒　井　美　幸

「酒井君、ちょっとうかがいますが、あなたが今歩いている二十一世紀とは、どんな世の中でしょう。」

私が今、司馬遼太郎にこのように質問されたらどう答えるだろうか。

『二十一世紀に生きる君たちへ』の中で司馬遼太郎が述べているように、人間は助け合って生きていかなければならず、孤立して生きられるようにはつくられていない。私たちには愛する家族や友人が必要であり、そういう関係における相手にはやさしくすることができる。とても素的なことだと思う。しかし、見知らぬ相手に対して、私たちはどのような態度を取っているだろう。

例えば、西ヨーロッパのあるアパートに住んでいた、ウォルフガンガ・ディルクスの悲惨な事例について考えることができる。同じアパートに住んでいた十七の家族は、ウォルフガンガを見かけないことに気づいてはいたが、誰も訪ねてみようとはしなかった。それで五年間も、彼が部屋で死んでいることに気がつかなかったのだ。発見された時には、彼はがい骨になっていた。

これは二十世紀に起きた事件だが、二十一世紀には起こり得ないだろうか。私は今の方が、他人に

無関心で愛情のない時代になっていると思う。二十一世紀になってまだ間もないが、すでに戦争は起こり、凶悪犯罪が増加している。

しかし、二十一世紀は悪くなる一方だ、と悲観的な考えに打ちひしがれていても仕方がない。社会をつくっている私たち一人一人が、司馬遼太郎の言う「自己」をしっかり持ち、支え合って生きていかねばならない。「自分には厳しく、相手にはやさしく」という自己を。

私は前述のように質問されたらこう答えたい。

「二十一世紀は始まったばかりです。すべてはこれからです。」

未来のバトンパス

史学科　吉　浦　　仁

司馬氏は、私たちの未来は輝いていると本文で語ってくれている。今まで私は、この言葉が信じられなかった。現在、私たちの周辺は目を背けたくなるような悲惨な事件や経済の低下による景気の悪化で満ちている。日本だけでなく、世界でも環境の悪化や各国の紛争。一体どこに未来の光を見出せというのか。

しかし、この話の本当の意味を私は知った。それは今年の夏だった。私の祖父が他界したのである。帰郷してわずか一月後であった。ただ悲しかった。何も考えられなかった。祖父がこの世を去る前日まで私の手を強く握り返してくれていた。その手は、とても強く、暖かかった。祖父は大きな手を通して伝えたかったものは何だったのだろう。それは、「今を、そしてこれからをしっかり生きなさい。しっかり地面を踏みしめて、がんばりなさい。」と伝えてくれたのであろう。

そう、それは司馬氏が語ってくれた「たくましい足どりで、大地をふみしめて歩かねばならない。」と同じことだ。氏が伝えたかった言葉の意味が、今ならわかる。それは、信じること。自分を、人を、未来を。私は、未来を信じることができなかった。それだけでなく、人も信じられなかった。人に接することに怯え、自分の中に逃げ込むばかりだった。

しかし、今なら信じられる。下を向いて待っていては、何も得られない。祖父の思い、司馬氏の願いを受けとめることができる。どんな未来が来ても胸を張って堂々と立ち向かうことができる。解決しなくてはならない問題は確かに多いが、今までを振り返って、改めるべきことは改めなくてはならないと思っている。

未来はどこにでもない。それは私たちの心にある。祖父がその手でつないでくれた未来へのバトンを私は確かに受けとった。その思いをつないで、今度は私たちが走っていかなくてはならない。「未だ来ない」みらいというゴールに向かって。

メッセージ　　芸術文化学科　有　吉　玲　那

“未来” とは、目に見えない、触れることのできない、形の定まらない逆不変的な存在である。この未知なる言葉は、非常に不安定でその上壊れやすく、手にするには大変困難なものだと私は考えてきた。

しかし、この言葉にどれだけの人が希望や夢を抱いてきたのだろう。もろいという最大の欠点を持ち合わせている反面、未来は計り知れない可能性という、これまでの欠陥面を瞬時に補ってしまう程の優れた部分を兼ね備えるとても魅力的な言葉なのだ。そしてこの文を書いた司馬遼太郎氏もその魅力にとりつかれた人物の一人なのだろう。

『二十一世紀に生きる君たちへ』の中で、司馬氏は未来を築く開拓者、つまり現代を生きる我々に向けて切なる願いを込めたメッセージを残している。すでに13年前という古い文にもかかわらず、その思いは今もなお強い意志を感じさせ、心を打つ内容に仕上がっている。中でも司馬氏自身が何度も繰り返し出している「たのもしい人格」とは、このたよりない世の中を先頭切って引っ張っていく上で、最も必要な人間面だと考えられる。どんなに有能な人材でも、人を惹きつけるカリスマ的力がなければそこからは結局なにも生まれない。

未来に向けて自分なりに最大限の努力をする。この事がいま私たちにできる一番簡潔でかつ最も重要なことであると、氏の文章を読み終え私なりの答えを導き出した。それが果たして本当に司馬氏が伝えたかったメッセージなのか確かめる事はできないが、少なくともこれから生きていく上で何らかの糧になるということだけは明らかである。

司馬氏との出会いをきっかけに、少しでも未来に向けて前進していければいいなと思う。

未来の平和を願って　　芸術文化学科　宮　澤　裕　子

私は、歴史を覚えるのが苦手です。年号や人物の名前など、右耳から左耳へ通り抜けていくのです。どんな人が、その時代にどんなことをしたのか、別に興味がないからでしょう。それに名前の難しい人が多いし。

ただ自分がこれまで歩んできた時間の中で、私と関わってきた人々のことは私の歴史の中にしっかりと刻み込まれています。その人たちと関わることによって、今の私が存在しているのです。

司馬さんは、自然と共に生き、自己をもち、他人に対してやさしくなれと言っています。私は、他人に対してやさしくなれた時の自分が好きです。逆に、やさしくなれなかった時、すごく後悔します。そんな自分が嫌になります。人にやさしくするということは、自分も好きになれることだと思います。みんながみんなにやさしくなれたらなあ。

夏休みに『ウィンド・トーカーズ』という戦争映画を見に行きました。第二次世界大戦の頃の話でしたが、たくさんの人が自分の国の勝利を願って自分の命をかけて戦う姿は、とても悲しいものでし

た。映画の中で、「好きで人を殺しているわけではない」と言っていました。誰もがそうだったのだと思います。殺したくない。だけど死にたくもない。戦争と言う渦の中にまき込まれてしまった人々は、何かを信じなければ、戦ってはいられなかったでしょう。家族のため、恋人のため、国ため。戦っている相手も同じこと。同じ気持ちなのに戦わなければならないのは、本当に哀しいことです。涙が止まりませんでした。

今、私がこうして書いている間も、誰かがペンの代わりに銃を持って誰かを殺しているかもしれないし、殺されているかもしれない。また、この瞬間に新しい命が生まれているかもしれない。今を生きている人も生まれてくる人も、やさしくなれる未来をつくっていってほしい。私はつくっていきたいと考えています。

二十一世紀を生きる私たちの課題　　初等教育科　松　葉　佐紀子

連日マスメディアでは世界の民族紛争がクローズアップされている。まだ記憶に新しい昨年の九月十一日に起きた‘同時多発テロ事件’では数千人の尊い命が一瞬のうちにして澄んだ青空の中に消えていった。考えてみれば地球なんて全宇宙から見れば、見えるか見えないかくらいの小さい存在だろうに、私達はなぜ人権や思想の違いなどを理由に、互いに憎しみ合い、争うのであろうか。

現代社会は物が豊かで便利になった。それに伴い、物の大切さや命の尊さについて考えようとする機会が少なくなってきているように思う。それは作者が指摘するように、「自然へのおそれがうすくなった時代」の到来といえよう。しかし、近頃では「人間は自分で生きているのではなく、大きな存在によって生かされている」という「自然へのすなおな態度」が取り戻されつつあるともいえる。

私達は昔も今も、また未来においても変わらないであろう「自然こそ不変の価値」であり、地球上に生存する生物の全てがそれに依存しつつ生きているということを、常に年頭に置いておく必要がある。

人間は独りで生きているのではなく、助け合いながら生きているという点に共感を覚える。他者との間には意見の対立や食違いが生じる場合があり、時に相手を傷つけたり、またその逆もあるだろう。しかし私達人間は「決して孤立して生きられるようにはつくられてはいない」のである。つまり人間は他者とのコミュニケーションを通して、互いに支え合いながら生き、その中で個々人としての自己の存在を確立していくのである。

二十一世紀がどんな時代なのか、誰しも先読みすることはできない。しかし輝かしい未来にするのもしないのも私達の手にかかっていることは確かだ。作者の期待に応えるべく精一杯今を生きようと思う。

（とくまつ・てるゆき　元宇佐市民図書館長　別府大学非常勤講師）